

## 授業探訪

総合系科目・スポーツ実習

# スポーツスタディ4（ネイチャーキャンプ）の 取り組み

スポーツウエルネス学部准教授 奇二 正彦

## 1. はじめに

本授業は、立教大学名誉教授である濁川孝志先生が始められた授業を、筆者が引き継いで実施している。1996年、大学三年生だった筆者はこの授業を受講しており、以降、毎年訪れるほど緑の深い土地となった。また本授業の宿泊先である湖山荘スタッフのきめの細かい協力によって、学生に豊かな学習体験を提供できている。

## 2. 奥只見の歴史と自然

授業実施場所は福島県西部と新潟県にまたがる越後三山只見国定公園内にあり、標高約800mにある湖山荘という旅館を拠点としている。周囲を荒沢岳、越後駒ヶ岳、中ノ岳などの急峻な山に囲まれ、周辺は川に沿って細長い高原平地となっており、古くから「銀山平」と呼ばれている。その名称にも含まれる銀である



が、江戸時代に幕府直轄の上田銀山があり、最盛期には年間7トン以上もの銀を算出し、最盛期には1万数千人もの往来が昼夜を問わずあったという（湯之谷村 2001）。江戸時代後期には銀の産出量も頭打ちとなって閉山され、太平洋戦争後まで静かな山村となったが、高度経済成長期に都市部への電力供給要請が高まり、1953年に電源開発によって只見川を堰き止めるダムが計画され、1962年に奥只見ダムが完成した。これによって日本最大級の奥只見湖ができ、只見川周辺の集落は水没。現在のように釣りや登山客を対象とした宿が湖周辺に点在する地域となった。

この地域は国内有数の豪雪地で、8月でも谷筋に雪が確認できる。つまり水が豊富な

ことからブナ、ミズナラ、トチノキなどの落葉広葉樹の森が広がり、林床には山菜や高山植物なども豊富に見られる。このような環境が多く野生動物を育み、山地の生態系における食物連鎖の最上位に位置するイヌワシやツキノワグマも確認されている。また、奥只見湖には周辺の山から水温の低い沢水が常に注ぎ、そうした環境を好むイワナが生息している。一部のイワナはダム湖を回遊することで成長し、昭和40年代には体長70cmを超えるイワナがメディアで取り上げられ釣りブームとなった。しかし、1975年頃頃から生息数の減少が確認され、保全活動の機運が高まった。地元民や在京の渓流釣りファンが1975年に立ち上げた「奥只見の魚を育てる会」は、奥只見湖に注ぐ一級河川である北ノ岐川を禁漁区とすることに尽力し、1981年に永年禁漁区となった。会長は作家の開高健である。

### 3. 授業の目的

本授業の目的は、直接的な自然体験を通して、自然体験と健康との関係について理解を深め、土地の価値を五感で感じることでその土地に対する愛着を育み、そこから環境問題を考えることである。

### 4. リスクマネジメント

本授業の目的達成以上に大切なのが生きて帰ることである。少々大袈裟かもしれないが、授業は大自然の中で行うことから、決して侮ることはできない。登山であれば滑落する可能性がある。カヤックであれば水難事故の可能性が伴う。キャンプであれば直火を扱うし、刃物で魚を捌いたりもする。他にも急な天候の変化、熱中症、道迷いなどあげればきりが無い。



そこで、毎年必ず事前にフィールドを調査し、地元の関係者に情報収集をしている。授業においても初日にリスクに関する講義を行う。

### 5. アイスブレイクとリスクマネジメント

授業は夏休みに集中授業形式をとっており、期間は4泊5日である。お昼過ぎに宿に到着した学生は部屋割り後、最初のアクティビティである森林ウォークを行うため、

危険生物のレクチャーを受ける。

レクチャー後、5人1組程度のグループを作り、マップと指令書を配布して森林ウォークを行う。指令の内容は3つあり、1つ目はマップに記されたランドマークを確認しながら、五種類の樹木の葉を見つけること。2つ目は開高健の言葉が刻まれた石碑を見つけ、そこに記されている銀山平の歴史を書き留めること。3つ目は、道路脇の土手を降り、北ノ岐川の雪解け水に手をつけて、何度あるか推測するというものである。この土地に対して五感を開くとともに、5日間一緒に過ごすメンバーとゆるくつながるためのアイスブレイクとなっている。

森林ウォークにおいて、学生グループが出発する時間を指定したらその5分前に教員二人はトランシーバーを持ってコースに出る。一人は川沿いの崖道に立って、通過する学生に対して足元の注意を促し、もう一人はゴール地点で待機して全グループが折り返したかを確認する。教員が移動している間、SAがタイムキーパーとなり、3分に1グループが宿より出発する。だいたいどのグループも2～3時間ほどで帰着する。帰着する頃には自己紹介も終わり、談笑しながらぶらぶらと宿に向かっている学生たちがいる。ほとんどの学生がスマホを見ておらず、景色を楽しんだり、写真を撮ったりしてリラックスしている。その後、自由時間となり18時から夕食となる。夕食も、地産地消のもの、例えば春に採った山菜や、ニジマスとアメマスの交配から生まれたミユキマスの刺身などが出る。

食後はすぐにリスクマネジメントの講義を二時間ほど行う。危険生物や各アクティビティで起こる可能性のあるリスクなどについて学び、重大な事故を防ぐにはどうすれば良いかディスカッションを行う。

## 6. キャンプ場でのアクティビティ

2日目から3日目にかけて、荒沢岳の麓にある銀山平キャンプ場で各種アクティビティを行う。まず午前中の涼しい時間帯にテントを設営するのだが、新型コロナウイルス感染症予防のため、2020年度より一人用テントを使用している。テント設営後は荒沢岳の谷筋に残る万年雪まで片道40分ほどの登山道をハイキングする。初日の森林ウォークより足場が不安定な登山道となるが、4日目に約5時間の本格的な登山を行うため、参加者にとって山に慣れるための重要なアクティビティとなる。目的地の万年雪であるが、筆者が学生だった頃は5m以





上の雪が谷を埋め、その斜面の上を白い息を吐きながら歩くことができた。しかし現在では谷底まで降りることができ、日陰に残る僅かな雪塊を見る程度である。

万年雪ウォークから帰着したらイワナの掴み取りを行う。現代の都市生活者にとって、食べ物を育てたり狩猟採集したりする機会は少ない。自分の生命が人間以外の生命によって支えられているというつながりを再確認するアクティビティとして位置付けている。まず、学生はサンダルや濡れても良い服に着替え、キャンプ場そばを流れる清流に降りる。くるぶしより上ほどの深さゆえ危険性はないが、先ほどまで佇んでいた万年雪の雪解け水が流れているため、真夏でも慣れるのに数分を要する冷たさである。慣れたところで川の石を使って幅2m、長さ7mほど

のいけすを作る。イワナは数センチの隙間でも逃げってしまうので、小石や砂利で隙間を丁寧に埋めなくてはならない。いけすが完成したら、そこに湖山荘スタッフが養殖イワナを放す。学生は軍手をし、俊敏に泳ぐイワナをなんとか捕まえる。捕まえたらソフトボール大の石で頭を叩いて殺し、ナイフで腹を裂いて内臓を取り除き、串に刺して湖山荘スタッフが引き取る。湖山荘スタッフは宿で数時間かけて炭火焼きし、夕食に献立として出される。

16時くらいからカレーと飯盒炊爨を行い、夜は焚火台を三つ出し、焚火をしながら哲学対話を行う。哲学対話とは、1960年代にアメリカで始まった「子どものための哲学（Philosophy for Children：P4C）」に由来し、本学文学部教育学科の河野哲也教授と共に行なっている授業「SDGs フィールドワーク」で手法を学び、本授業にも活かしている。内容としては、学生が問いを自分たちで設定し、ボールやぬいぐるみなどを持っている者が話し、他のものはその話を遮ったり否定したりしないなどの基本的なルールのもと、自由に対話するというものである。学生は普段、教員から課題を課されることが多いため、良く答えるための訓練を受けていると言えよう。しかし、自ら問う機会はそれほど多くない。実際哲学対話のルールを伝えると戸惑う学生もいるが、その後の対話は、静かであるが着実になされていると感じる。

## 7. カヤック

3日目はテントを撤収し、そのまま湖上にてカヤックを行う。全員がライフジャケットを着用し、ストレッチなどを入念に行う。毎年ほぼ全員が初心者であるが、自転車の乗り方と同じで、実際にやってみることが上達の近道のため、陸上で操作の方法を簡単に教えた後すぐに湖上に出る。5分もすると全員行きたい方向へパドリングすることができ



るようにするため、北ノ岐川を遡上したり、車道のない湖の対岸へツアーをしたりする。カヤックは水面に近く、また非常に静かに移動することができるため、野生動物の警戒度が徒歩時に比べると低い。それゆえ湖岸に佇むトビやカワウ、カワセミなどの野鳥を観察することができる。ひとしきりカヤックを楽しんだあとは、5分ほど波に揺られ瞑想体験を行う。少しの風でもカヤックは流されるため、5分経つと、先ほど自分がいた場所からかなり流されていることに驚く。

その後湖山荘に帰着すると、夕食の時間まで自由時間をあえて設けている。佇むだけで気持ちの良い土地ゆえに、アクティビティを詰めすぎず、自由に自然を感じてもらうことも重視している。

## 8. 銀の道登山

4日目は本授業で最も体力を使う銀の道登山である。銀の道とは、江戸時代に銀を産出し、鉱山が賑わっていた当時、銀山平から麓の小出村まで降りる唯一の山道のことである。本授業では、4日目の早朝にバスで麓の登山道まで降り、5時間ほどかけて山の頂上まで登り、そこからまたバスに乗って湖山荘まで戻るという行程にしている。



現在の銀の道は巨木のブナが林立する深い森になっており、学生にとっては本格的な登山体験となる。一定のペースで登ることや、こまめな休憩と水分補給の必要性など、登山の基本を学ぶことができる。かつてこの道を重い銀を背負って移動していた人がいたことに思いを馳せたいものだが、実際にはそんな余裕はなく、頂上はまだかと必死に歩く学生たちが、お互いに励まし合う姿が見受けられる。

## 9. 最終プレゼン

---

銀の道登山から帰着し、4日目の午後に最終課題を課す。23年度のお題は、湖山荘が今後もこの土地で持続可能な営業を続けるために何をすべきか、とした。プレゼンの中身は学生に決めてもらったところ、SNSの一つであるinstagramで効果的な顔出し看板を作ることとなった。材料は段ボール、カッター、マジックや絵の具など、すぐに用意できるものに限り、5日目の午前中を締め切りとしてグループワークを行った。審査員は湖山荘スタッフとし、実際に湖山荘のinstagramに載せてもらうこととした。4日目の夜はその作業で大いに盛り上がっていた。

## 10. 本授業の意義

---

本稿では、授業内容を部分的に紹介した。最初に示した通り、本授業は直接的な自然体験を通して、自然体験と健康との関係について理解を深め、土地の価値を五感で感じることでその土地に対する愛着を育み、そこから環境問題を考えることを目的としている。豊かな自然の中で活動し、よく食べてよく眠れば、心身ともに健康になることをまずこの授業で体感して欲しい。また、地球温暖化や生物多様性の損失など、危機感を醸成させてその課題解決について考えることも大事であるが、楽しかった、美味しかった、美しかった、壮大だったというような、ポジティブな感情からも環境問題に向き合っていて欲しいと思っている。なぜなら、そのようなポジティブな感情によって醸成された愛着があれば、その土地が破壊されれば悲しいと素朴に思うはずだからである。このような、身体に根付くポジティブな感情を換骨奪胎してグローバルな環境問題に向き合うことが、この授業の可能性の一つだと考えている。

きじ まさひこ

### 参考文献

湯之谷村 (2001) 「湯之谷村のあゆみ」